



除染しなければならない場所に、人が生活している矛盾が続く(2012年9月16日／福島市内)

県外のもうひとつの家

～セカンドハウス 1年半の取り組みと今後～

昨年の夏休みから今夏まで4シーズン、日本YWCAのセカンドハウス・プログラムで住宅を提供してきたことで、私は福島の4家族にお会いし、親しくお話を聞かせていただく機会を得た。来られた時期、ご家族の環境によりそれぞれ抱えておられる悩みは違ったが、どのお話からも私は原発事故が人々にもたらした被害・現実の一端を教えていただいた。

セカンドハウスは「何のプログラムもご用意しないが、どうぞ自由にご家族でお過ごしください」というものだが、ご家族は子どもたちのためにほぼ毎日楽しい予定をあれこれ立てて過ごされる。休暇でお父さんが来られたら小旅行に出かけることもある。2家族のお父さんは福島から車で来られた！ご両親のご苦労も大変なものとお察しする。

今夏来られた2家族はセカンドハウス利用の前後に子どもたちを保養プログラムに参加させていら

っしやった。そのプログラム選びもなかなか大変なようだ。プログラム数は全国的に増えているようだが、時期、期間、親の参加の有無、費用その他いろいろで悩む。初めてのところでは不安も多い。多くのプログラムは期間が1週間ぐらいなので、プログラムをはしごしていくことにもなる。その移動も結構大変な労力だ(*保養は期間が長ければ長いほど効果があるようだ)。

こんなご家族のご苦労を目の当たりにして、私は原発事故を起こした企業、政府などの責任の重さについて改めて思う。6月に成立した「原発子ども・被災者支援法」では、避難した方への移動・住宅・就学・就業支援とともに、避難しない方にも医療・就学・食の安全・放射線量の低減・保養に対する支援が定められているという。この法律を実質あるものにするため、今、法律の具体化、来年度の予算化に向けて運動が始まっている。私たちもさまざまなプログラムで知りえた被災者の皆さんの思いを、そういった運動に反映させていきたい。

(神戸YWCA 会員:川辺比呂子)

2012 年夏 セカンドハウス・プログラム 利用者の方々の思い

神戸 YWCA は、この夏も日本 YWCA と協働して「セカンドハウス・プログラム」を実施することができました。会員や関係者の方々からご提供いただいた3住居に、福島市内に住む5家族が来てくださり、暑い暑い神戸で、思い思いの夏を過ごされました。ご利用くださったご家族に、セカンドハウスを利用した思い、地域の現況等を寄稿していただきました。

■ Nさん家族（福島市在住）

この夏、私たち一家は夫婦と二男の三人でセカンドハウスを利用させていただきました（長男は一人で広島に小学生向けの保養キャンプに行っていました）。

きっかけは、被災者支援のとあるホームページにセカンドハウスの活動が掲載されていたことでした。

私たちの住んでいる福島市の現状は、普段の生活においては一見、震災前とそれ程変わらない状態に見えますが、子どもの世界は全く違っており、それは親の考え方によっても左右されているようで、放射線を気にしている親は私たち一家のように外では絶対遊ばせないのですが、気にしてない親は、除染もしてない場所でも子どもを平気で遊ばせていたりします。

他の家庭のことを、とやかく言うつもりはありません。しかし、心配なことがあります。甲状腺検査結果で、

平均年齢が10才の福島県の子どもの35%にのう胞が発見されたことです。この結果について比較できないか調べてみますと、「福島大学副学長山下俊一氏らのグループが2000年に長崎県で行った調査で、7才から14才のこども250人中、甲状腺のう胞が見られたのは0.8%（2人）だった」ということで、その差は歴然としております。直ちに二次検査を要しないレベルと報告されておりますが、絶対おかしいと思います。まわりの子どもたちも、のう胞がある子どもが凄く多く、それが普通だと思っているため、みんな何とも思っていない人が多いのです。幸いにも私の息子たちは、今回の甲状腺検査の結果では問題ありませんでしたが、家が古い木造平屋建のため、ガラスバッジ(*)による調査結果での被曝量は高かったことから、これから先どうなるか分かりません。特に2~3年後に福島の子どもたちが、どうなってしまうのか考えてみただけで恐ろしいと思います。

低線量被曝についてのリスクが、どれだけあるかは明らかではありませんが、リスクはできる限り減らすよう努力することは親の責務と考えております。そのために一家で（又は母子で）自主避難する家庭もたくさんいますが、そこまでの勇気はなく、休みの日はなるべく県外等で保養をしたいと考えるようになりました。

神戸のセカンドハウスには、8月16日から私も含め3人で6日間、母子だけで4日間の計10日間お世話になりました。その間、甲子園球場で高校野球を見に行き、大阪の街を食べ歩きしたり、明石海峡大橋に行き、アウトレットでショッピングしたり、中華街をまわってから神戸港を散策したり、六甲山でフィールドアスレチックをしたり、王子動物園にパンダを見に行ったり等々、セカンドハウスのお陰で数々の楽しい思い出ができました。それから、歓迎会も開いていただき、大変うれしかったです。これもセカンドハウスを支援していただいている皆様方のお陰であり、本当にありがとうございました。

震災からの復興は年月の経過とともに近づくはずですが、原発事故の影響は逆にこれから出てくるこ



高校野球も観戦

とが懸念されます。けれども、支えてくれる人たちがいることを胸に抱きながら、これからも前向きに生きていきたいと思います。

*ガラスバッジ: 外部被曝の積算線量計。昨年9月以降、福島の小学生に配布された。1ヵ月ごとに専門機関が積算線量の解析を行い、その結果を保護者に知らせる仕組みになっている。しかし、その場での線量がわからないため、どこがホットスポットかわからず、外部被曝を少しでも少なくする助けにならないと批判も多い。

■ Oさん家族 (福島市在住)

私は今年の夏、5歳の息子と二人でセカンドハウスを利用して神戸で16日間過ごしてきました。

セカンドハウスを知ったきっかけは、ちょっとした偶然からでした。函館YWCAで企画した年長以上の子どもを対象にした避難プログラムをたまたま目にし、プログラムの対象外なのを知りながら、どうにか息子と参加できないかと何度か電話した時に、函館YWCAの方からセカンドハウスの事を教えていただきました。

震災以降、子どもたちを福島から出したい気持ちはあったものの、上の子たちが高校1年生・中学3年生と下の子と少し歳が離れていたため上の子どもたちに合わせて生活してきたので、下の息子が知らず知らず我慢を強いられた生活をしていました。しかし、本人は震災時、3歳だったこともあり、震災前をよく覚えていないため、幼稚園で外遊びをしないことやプールがなかったことは、彼の中では我慢なことではなく、幼稚園生活が始まった時から普通の事だったと思います。

昨年の夏はいろいろな避難プログラムがありましたが、小さい子どもだと親が同伴なので、普段は仕事をしている私にとっては仕事の都合とプログラムの日程が合わない、また、参加の抽選にはずれたりして県外に出る機会がなくて過ぎてしまいました。そんな事もありセカンドハウスのお話を聞いた時は、自分の都合で日程を組める事がとても魅力でした。それは子どもがまだ小さいので、びっしり日程が組まれたプログラムだと、集団行動が出来るのかが不安



だったからです。行き先も自分で選択でき、移動手段も自分で選択出来るのは、長距離の移動に不安はありましたが、乗り物が大好きな息子は移動の乗り物も旅行の楽しみの一つにする事ができました。

神戸での過ごし方は、事前に子どもが参加できるようなプログラムを探していただき、神戸YMCAのデイキャンプと短期のスイミングスクールに参加する予定を事前に決めて出発しましたが、正直、慣れない土地、環境、知らないお友達の中で小さい息子は大丈夫だろうかと不安がありました。しかしデイキャンプから帰ってくる息子の顔は日に日にたくましく見え、満点の笑顔で帰ってくる姿を見て、こんな笑顔をする事を忘れていたなど、はっと思う程でした。

スイミング等のプログラムがない日は、駅前の噴水で遊んだり、神戸YWCAの方々に六甲山や麻耶山、明石の方など色々なところへ連れて行っていただき毎日がとても楽しく過ごせました。皆さんに温かく迎え入れていただけて、家族と離れている寂しさもほとんどなく、あっという間に16日間が過ぎてしまいました。誰も知り合いのいない私にはとても心強かったです。福島に残っていた家族にとっては、息子が真っ黒に日焼けし、一回り大きくなって帰ってきたことが何にも変えがたいお土産になりました。

福島に戻って来て思う事は、これからやはり本当にここで生活を続けていていいのだろうかという不安がありますが、今は自分の出来る事を精一杯していこうと思っています。今回神戸で頂いた優しさを



どの様に返していけるだろう・・・、わたしに何が出来るのだろうか・・・、今回頂いた出会いを大切にしていきたいと思っています。

日本のあちこちに福島から母子だけで避難をした方々がいますが、母子避難をした方々はもっともっと大きな不安や寂しさを持っていると思います。今回家族と離れてみてほんの一瞬ですが、母子避難した方々の想いに触れられた気がします。福島にいても生活への不安、県外へ出ても別な不安や負担。どちらを選んでも楽ではないと思います。

今回のセカンドハウスの機会をいただいたのは、とても幸せだったと思います。福島の子も達が普通に外で遊んだり、食べるものに気を使わないでいられる日が一日でも早く来るといいなと思います。

■ Aさん家族（福島市在住）

この夏は皆様方のご厚意により、一家4人また実父も加えてセカンドハウスを利用させて頂きまして、本当にありがとうございました。

私たち親子の住む福島市は、吾妻連峰の麓に広がる盆地の街です。夏は暑く、冬はそれなりに寒く、上げてあげれば果物だけは美味しいという特にこれといった観光資源の乏しい平凡な街と思っておりました。そして3月11日、あの忘れることのできない東日本大震災と、それにより引き起こされた福島第一原子力発電所の事故がおきました。幸い福島市には震災自体の影響は少なく、見た目には目立った変化はありません。けれど近くのいつも行っていた公園にも、あの雄大な吾妻の山にも、小さな子

どもたちを連れては以前のように気軽に遊びに行くことはできなくなりました。福島市民なら、以前なら当たり前のように食べていたあの美味しい福島の桃、なし、リンゴも、もう気軽に子どもたちの口に入れることもできなくなりました。

外で遊べない、福島の美味しい恵みを食べられない子どもたちを待っていたのは、甲状腺の検査とホールボディカウンターによる内部被曝の検査でした。そして、福島はいつしか「フクシマ」とか「FUKUSHIMA」とかよばれることも多くなりました。あの事故の前に、いったい誰がこんな事態がおけると予想できたでしょう！

福島を離れた親子も大勢います。福島に残った私たちはそのことを批判はしません。福島を離れることが、どれだけの大きな犠牲を払い、どれだけの勇気が必要とした決断か、みな十分にわかっているからです。福島に残った人たちは努めて平静に振る舞っています。まるでここが特別な場所ではなく、日本全国のどこにでもあるような街（そう以前の福島のような）であるかのように振る舞う人が多いと感じています。しかし、言葉にならない閉塞感はこちら福島に住む人なら全員が感じていることだと思います。この閉塞感、原発事故がいったいどれだけのひどい事故であったか理解できないような小さな子どもたちにも確実に広がっていると思うのです。

そんな中、皆様方のご厚意によりこの夏を親子ともども関西で過ごすことができました。あるご夫妻にはヨットにも乗せて頂き、瀬戸内海のクルージングを楽しませて頂きました。海の上から見上げる明石大橋、潮目が変わり海の色が変わる様子。初めての体験に子どもたちばかりでなく大人も夢中になってしまいました。こんなに無邪気に、なにものも気にすることなく夢中になって、いまこの瞬間をこころから楽しんだのはいつ以来でしょう！

そしてご用意頂いたセカンドハウス。そこはしっかりと生活感のある温もりのある場所でした。丁寧によく使い込まれた家具や調度品、手入れの行き届いたお庭。お心遣いを随所に感じられ、ホームス

テイをさせて頂いているようでした。本当に心の底からリラックスした時間を過ごすことができました。

今でも福島のローカルニュースの大半は原発事故・放射能問題に費やされていますが、それに反して全国のニュースではその扱いは徐々に小さくなっているように感じられます。まるであの震災、原発事故をなかったことにしたいのかと感じてしまうこともあります。いちばん恐ろしいのは、あれだけの震災や原発事故を経験したのに日本が変われない事なのではないでしょうか。

かつて阪神大震災で大変な被害にあわれた関西の方々が、私たちを励まし助けてくださっています。そしていつも私たちを気にかけてくださっています。同じ福島市民でも本音でお互いの考えを話す空気が徐々になくなって来つつある中、私たちの不安をわかって頂きいつも気にかけて頂く方々がいらっしゃることは、私たちにとって本当に大きな支えなのです。

夏休みが終わり子どもたちの学校、幼稚園も始まりました。子供たちもこのひと夏の経験を通じて一段とたくましくなったようです。子供ながらも、このひと夏の経験が単なる遊びではなく、いかに多くの方々のご支援のお陰かしっかりと感じているようです。私たち親子にとって一生忘れることのできない夏になりました。本当にありがとうございました。

■ Tさん家族（福島市在住）

「どうぞ、神戸に来てください」。

神戸YWCAのセカンドハウス担当者からお電話を頂いたとき、私は感謝と驚きの気持ちでいっぱいでした。私がこのセカンドハウスを初めて知ったのは昨年夏の保養プログラムでした。通っている北信カルバリー教会には幾つかの保養受入れのお知らせが届いていました。その中から、優しい色合いのパンフレットに目が行きました。

それまでの私は夏休みに娘だけでも福島から避難させたいと、インターネットで毎日調べて申し込ん

では抽選に外れるという日々を過ごしていました。そんな時、「大丈夫ですよ」と快く受け入れてくださったのがセカンドハウスさんでした。出来るだけ遠くへ行きたい思いが強く、沖縄の教会へお世話になりました。原発事故のことを忘れて、いつまでも外に出ていたのを覚えています。その後、冬休み、春休みと必ずメールで連絡をいただいております。福島の子供達やその家族のことを忘れずに覚えて下さることがとても嬉しかったです。

今年、娘は受験生です。看護師になりたいという夢を持ち勉強も頑張っています。それでも、親として少しでも保養させたいと願っていましたが、教会や県の保養プログラムは小学生までのものが多く、なかなか見つかりませんでした。夏期講習もあるし、周りのお友達は保養へ行く雰囲気ではありません。親にとって福島に住んでいる以上、子どもへの不安は一緒です。高校生になったら益々保養も無くなってくるでしょう。自費での短期保養も限界があります。そんな時、YWCA からこの夏もメールが入り、「ここしかない」と祈りながら連絡を取らせていただきました。関西で第一から第三希望まで出しましたが、確認したところ、最初は「空きは無い」とのことでした。家族で相談し、夏期講習の休み期間のお盆の一週間は親戚にお願いしてみよう決めました。すると何日かしてYWCAから尼崎のセカンドハウスで受け入れをして下さるとの電話をいただき「あー救われた」と思いました。家主さまは三人の介護をなさっており、とてもお忙しいと聞いておりました。そんな大変な中、受け入れをして頂きました事に感謝し、また勉強にもなりました。逆の立場になった時、私たちは大変な方々をいつでも受け入れる事の出来る家族でいようと話すことが出来ました。

今の福島は静かに過ごしているようですが、実際は水を買って求め、出来る限り遠くの産地野菜を買い内部被ばくを少しでも減らそうと母親たちはアンテナを張り情報を取り入れ生活をしています。無洗米を買い、ペットボトルの水でご飯を炊く家族も珍しくありません。私は原発事故以前から無農薬無添

加の食材を宅配で頼んでいましたが、今は放射能チェックが加わりました。毎日、住んでいる所の放射能値を確認し、風向きを確認して生活をしています。仲の良い友人も何人か県外へ行ってしまいました。残っている私たちも避難した家族も不安は同じです。それでも頑張っています。時々疲れてしまいます。だから・・・時々休みたいです。時々福島を離れて普通の生活をしてみたいくなります。そんな時のYWCAの支援が本当に助かります。そして応援していただいていることで、子どもたちと親たちが大好きな福島へ帰って「もう少し頑張ろう」と思えます。

私たちに心と体の居場所を与えて下さる方々にこの場をお借りして感謝いたします。たくさんの「ありがとう」を心からお伝えし、皆様方のことをいつもお祈りしております。

■ Kさん家族（福島市在住）

震災と原発事故から早一年半。今夏も、私たち親子は神戸YWCAのセカンドハウスで保養することができた。神戸YWCAとの出会いは、震災から約4ヶ月のことだった。事故後、放射線の危険性から子どもたちの外活動が制限され、被曝の心配を胸に、夏休みの避難先を考え、探していた時だった。丁度、通っていたキリスト教会で、セカンドハウスの案内・チラシを手にしたのがきっかけになった。昨夏は結局のところセカンドハウスは利用せず、キャンプの切替えをさせていただいたのだが、昨冬からは、子どもたちの長期休みの度、セカンドを利用させていただいている。

今夏も兵庫の一軒をお借りして子どもたちを保養させることができ、心から感謝している。セカンドハウスを利用して感じたことは、他のキャンプとは一味違う良さがあり、沢山の恵みがあったということだ。

まずは、子どもと自分のペースで生活できるということ。集団生活ではないから、普段どおりの家庭生活を、安全な場所で、家族で送れたことである。

次に奪われてしまった正常な日常生活を取り戻す

ことができたことである。福島にいて、買い物一つ、安全な産地の物を探すのに苦労したが、その手間が省け、その土地の物を気軽に手に取ることができた。そして、暑い日には、窓を開け、外に洗濯物や布団を干し、庭の手入れや草木に水やりができた等、原発事故以前は当たり前だったことを取り戻せたのである。

また、福島で放射能のことを気にせず生活している人々とのギャップによるジレンマから解放された。避難や保養の度、毎回思うのだが、子どもたちが屋外で思い切り自然と触れ、伸び伸び動いている姿を安心して見ていられる点が何よりも良かった。

今夏も、春も、冬も、家を貸して下さった大家さんをはじめ、YWCAの会員、スタッフの方々が大変親切に接して下さり、惜しまず手を差し伸べて下さったことに改めて深く感謝したい。おかげで孤立せず、心温まる交流の中で信頼と絆が生まれたと思う。心細かった私たちに、神戸YWCAのセカンドハウスは希望を与えてくれた。そしてYWCAの女性たちの愛と行動力に勇気と励ましをいただき、力づけられた。

自主避難も真剣に考え悩んだが、今尚、それができずに一年半経ってしまった。せめて長期休暇は子どもたちを保養に出そうと必死にここまでやってきた。福島の除染は、当初の計画より進行が遅れ、山間部は手が回らず、効果も期待できないでいる。他に健康検査、食品検査、放射線測定、汚泥の処理と貯蔵場所の問題、加えて低線量被曝と内部被曝の問題と、色々なことが山積している中、ここ Fukushima に居続けている間は、子どもたちの命と健康の負のリスクを減らすため、繰り返し、保養場所を求めていこう。セカンドハウス、是非、今後とも継続して頂きたいと願っている。

ご寄稿に感謝します
いっしょにいぐべ福島！